

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ ～星の王子様～

大島 めい 村上 彩 村山 美樹

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

「星の王子さま」は 100 以上の言語に翻訳され、世界各国の子どもから大人までの幅広い人々に愛され続けている。その理由は、幻想的な雰囲気の中で王子さまが伝える名言の数々人々の心に素直に打ち響くからである。「星の王子さま」以外にも世界には数多くの児童文学があり、世界中の子ども達に親しまれているが、実はその殆どが子ども向けに分かりやすい話に書き換えられていることはあまり知られていないことかもしれない。例えば、グリム童話の「シンデレラ」は主人公が姉にナイフで足を切り落とされるというのが原作であり、日本昔話の「桃太郎」は桃を食べて若返った老夫婦の子どもが主人公というのが原作である。このように、日本も含めて世界の多くの児童文学は時代に即して修正されているが、一方で「星の王子さま」は挿絵を除く本文に関して、現在に至るまで原文が受け継がれているのである。そして、この理由には作者の戦争体験が大きく関係しており、多くの研究者の研究対象となっている。そこで、本研究では作者アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリがこの作品に込めたメッセージを読み解いていくと同時に、その真相に迫っていくことにする。

1 章 読み解く前に

星の王子さまの作者であるアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、第二次世界大戦を経験して様々な作品を残してきた。それらの作品には現代を生きる大人と戦争に対する彼自身のメッセージが込められている。そこで、この章では「星の王子様」を読み解く前に、作者アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの生い立ちとその時代背景について述べていく。

1.1 節 アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ

1900 年 6 月 29 日、フランスの地方都市リヨンで伯爵家の 5 人兄弟の長男として生まれたサン＝テグジュペリは幼少の頃より操縦士に憧れていた。20 歳の時、兵役をきっかけに操縦士として活躍するが、退役した後、空を飛ぶことが大好きな彼は航空郵便会社に入社して郵便飛行士として活躍する傍ら、雑誌に短編小説を発表して文才の一端を示した。1931 年、アルゼンチンで知り合ったコンスエロ・スンシンと結婚するが、1939 年、第二次世界大戦が勃発すると偵察飛行の任務に就くこととなる。その後、フランスの首都パリがドイツに占領された為、戦争の嵐のないアメリカに亡命した。そして、亡命中のアメリカで「星の王子様」を執筆し、1943 年 4 月 6 日に出版したのである。同年にフランス軍に再入隊すると再び偵察飛行の任務に就いた。しかし、翌 1944 年 7 月 31 日、地中海コルシカ島から偵察飛行に飛び立ったまま「星の王子様」の主人公と同じように、44 歳の時、消え去ってしまったのである。

1.2 節 第二次世界大戦

第一次大戦後、ベルサイユ条約に対しドイツ、イタリア、日本は不満を抱いていた。イタリアではムッソリーニが不満分子を率いてローマに進軍して政権を奪取した後、反共産主義、反議会主義、軍国主義に基づく全体主義体制「ファシズム」を樹立した。このファシズムの動きはやが

てドイツと日本にも波及した。

1929年、世界恐慌では植民地を持たないドイツ、イタリア、日本を不況が直撃し、三国における現状打破の動きを促進させ、ドイツのポーランド侵入を機にフランスはドイツに宣戦したが、フランス軍はドイツに対して積極的な軍事行動をとらなかった。これは、第一次世界大戦の後に防御の有利さを過大に評価して、攻撃の重要性を否認する戦略理論がフランスで支配的となっていた事やはじめからヒトラーとの和解を望む勢力が政府や軍部内で強い影響力を持っていた為でもあった。そして、1940年5月10日に東部での作戦を終えたドイツが西部戦線に対する総攻撃を開始すると、フランス軍はスダン近傍で突破され、ドイツ軍はフランス領内深く侵入した。6月22日、調印された休戦協定はフランス本土の60%、すなわち、フランスの北半分と西部の大西洋岸一帯をドイツ軍の軍事占領下に置くこと、フランスが1日に四億フランの占領費を支払うこと等が規定された。

フランスの敗北があまりに圧倒的となり、ヒトラーの勝利はもはや疑いなく、また、イギリスの屈服も時間の問題だと信じられていた。しかし、1941年に始まったドイツ＝ソヴィエト戦争は、攻守を代えてソヴィエト側が攻勢に移り、アメリカも参戦することにより、ドイツの究極的な勝利はもはや確実ではなくなったのである。敗色濃厚となり、労働力の不足に悩んだドイツは労働者の徴用を計画して、フランスでは強制労働法が布告された。多数のフランス青年がドイツに送られるか、徴用を忌避してレジスタンスに加わるかの二者択一を迫られ、結果として、多くの徴用を忌避した青年たちはレジスタンスの武装集団に加わり、国内フランス軍という単一の組織に結集された。そして、1944年アメリカ、イギリス連合軍がフランスに上陸すると、フランス国内軍はこれに呼応して各地で蜂起した。ドイツ軍は1944年末までにフランス本土の大部分から退き、1945年3月ドイツは連合軍に無条件降伏を申し入れた。第二次世界大戦でのフランスの戦死者は、15万人であったが、フランスの国外で死んだ者は28万人に達した。また、解放戦がフランス本土をよぎって行われたことにより工場、鉄道、道路、家屋等の破壊は著しく、解放時の電力は戦前の半分、工業生産は三分の一に過ぎなかった。加えて大都市には深刻な食糧危機もあり、家には身体を温める石炭さえも当時はなかったのであった。

1.3 節 代表作

デビュー作である『南方郵便機』は、サン＝テグジュペリ自身の飛行の体験が熟成されていて、作者独自の思索へと向かう途中にあり、自らも背反への不安を抱えて方向を模索していた若き日の作者の姿を映し出している。以後の作品には見られない若い魅力に満ち溢れた作品である。また、作者自身の飛行機乗りの体験を活かしている『夜間飛行』は、夜間飛行という危険極まりない事業の中で浮き彫りにされる、人間の尊厳と勇気が主題となっている作品である。1939年に出版された『人間の土地』は、飛行士としての15年間の経験を基に巧みな筆致で語るエッセイであり、極限状態での僚友との友情や、人間らしい生き方とは何かが主題となっている。この作品を出版した後に、第二次世界大戦が勃発して『戦う操縦士』を執筆する。作者自身がアラスに集結したドイツ戦車部隊の所在を確認すべく偵察飛行に出撃した。その当時の生と死の狭間での数々の省察を経て、やがて人間の再興と、文明の再生の条件が語られた作品である。

2 章 通説

星の王子さまは一見単なる絵本のようなのだが、様々な諸説があり、通説と異説に分かれている。その中で、通説には子どもの心を忘れてしまった大人へ向けて「大切な物は目に見えない」という作者のメッセージがあり、純粋な感情を思い出して欲しい事や何事にも疑問を持って欲しい事等が込められている。そこで、この章では「大切な事は目に見えない」事に着目して、節ごとに

隠されている作者のメッセージを読み解いていく事にする。

2.1 節 『星の王子さま』 あらすじ

飛行士は小さい頃に絵描きになることを目指していて、ウワバミが象を飲んだ絵を描いたが、大人にそれは帽子の絵だと笑われ、そんな大人に失望して大人になると飛行機乗りになり、空と星を友達にして暮らしていた。ある時、飛行機の故障で砂漠に不時着して翌朝飛行機を調べていると羊の絵を描いて欲しいと声を掛けられた。その声の主が星の王子さまだったのである。飛行士は羊の絵を何枚か描き、加えて例のウワバミの絵を描いて見せると王子さまはゾウを飲み込んだウワバミの絵なんかいらないと答えたのだった。飛行士は王子さまから様々な話を聞き、王子さまのことを知っていった。王子さまは小さい星B-612に住んでいて、その星には小さい2つの活火山と1つの死火山があり、美しいバラが咲いていた。しかし、自尊心の強いそのバラはわがままを言って王子さまを困らせた為に王子さまは自分の星を捨てて宇宙に旅立った。そして、旅に出た王子さまは様々な星を訪れて王様や実業家、軍人等に出会い、地球に辿り着いた。この地球で王子さまはヘビやキツネと友達になり、ヘビは王子さまが自分の星に帰りたくなった時には必ず役に立つことを約束した。また、キツネは親しくなった王子さまとの別れを惜しんで秘密の手紙を送り、その手紙には眼に見えないものの中に大切なものがあると書いてあった。キツネの手紙を読んだ王子さまは自分の星に残してきたバラのことを想い自分の星に帰ることを決意し、飛行機が直った翌朝、飛行士の悲しみをよそにヘビの世話になって自分の星に帰って行ったのである。

2.2 節 ウワバミ

作者が初めて書いた「第一号の絵」で物語は始まる。子どもだった作者は本でウワバミという大蛇が獲物を丸呑みにすることを知り、絵で描いてその怖さを大人へ知らせようとする。しかし、大人たちは誰一人として怖がらない。作者は失望してどんな絵なのかを説明するが、大人達にはその絵の外のウワバミや中の獲物には興味がなく、大人にとって蛇の外側を描く事や内側を描く事は関係ないのである。そのような大人を批判しながらも作者もまた相手に合わせた人生を送るのである。これは、まさに現代の大人と子どもではないだろうか。大人も昔は子どもであって、子どもの頃には純粋に物事を考えていたにもかかわらず、大人になって冷めた感情を抱くようになるのではないだろうか。前編Iでは、子どもの純粋な気持ちを現代の大人が奪ってしまわないように、子どもの頃の純粋な感情を大人に思い起こしてほしいという作者のメッセージが込められているのである。

2.3 節 バオバブ

王子さまはいつでも夕やけの空を見ることができるよう小さい星に住んでいて、その星にはバオバブという恐ろしい種がある。そして、怠けものが一人で住んでいた星にバオバブが生い茂って崩壊しそうになった話をする。これは、人類が科学の発達を後先考えずに急速に取り組んだ事による地球の崩壊を象徴しているのだと考えることができる。星の王子さまの住んでいるB-612を地球だと例えると、バオバブは科学文明の象徴だと言える。人類は便利という点で科学の進歩を進めてきたが、科学がこのまま際限なく進むのであれば、温暖化などの環境問題により地球を崩壊してしまうであろう。前編Vでは、人類の怠慢が生み出したバオバブの木による地球の崩壊を警告しているのである。

2.4 節 バラのトゲ

バラにはトゲがあるのに羊に食べられてしまうのであれば、トゲは何の役に立つのかと王子さまが飛行士に何度も問うが、何度質問しても飛行士は素っ気ない返事をする。そして、何故に花が何にも役に立たないトゲを作るのかを知りたいと思うことは大事なことはないのかと問う場面がある。これは、何も意味がないようなことでも、どのような意味があるかを考えることに価値があるということを伝えているのである。ここで、世の中には簡単に見えないものがたくさんあるというウワバミの話を思い返してみると、ウワバミの話と子どものように何事にも疑問を持って問うことの必要性を伝えているこの場面は繋がっていると考えることができる。すなわち、王子さまにとってウワバミの内側を見ることが聞き始めると後に引かないということは一体のものと言えるのである。

2.5 節 六つの星巡り

王子さまはバラとのいさかいを機に様々な事を学びたいと感じて、渡り鳥と共に星を巡る旅に出て、そこで六人の大人達に出会うのである。一番目の星では無理のない命令をして人を支配したつもりでいる孤独な王様に出会い、二番目の星では他人からの評価が生き甲斐の自惚れ屋に出会う。また、三番目の星では過去の失敗の原因探求から逃げ出して忘れようとする呑み助に出会い、四番目の星では金持ちになる事だけが生き甲斐の実業家に出会う。王子さまはこれまでの星で出会った大人に対して、「大人はおかしいのだ」と繰り返し感じている。しかし、五番目の星では義務である仕事だけを続けている点燈夫に出会い、初めて好意を抱くのである。そして、六番目の星では間接的な手段によって得られた情報を真の知識と思い込んでいる地理学者に出会う。王子さまが点燈夫だけに好意を抱いたのは、王子さまが自己中心的に物事を考えていないからだと考える事ができる。つまり、自己満足ばかりの生活は本当に豊かであるのかを現代の大人へ訴えているのである。

2.6 節 地球

王子さまは六番目の星で出会った地理学者に薦められた地球に行き、そこでへびと出会う。そのへびは、地球の中でも人間がいなくて寂しい砂漠に着いた王子さまをかわいそうに思い、小惑星が恋しくなったら助けることを約束する。その後、王子さまは高い山に登って周りに話し掛けるが、言ったことがオーム返しになるばかりで地球はへんな星で人間に味がないと感じる。これまでに王子さまは六つの星で出会った六種類の大人を批判してきたにもかかわらず、地球の人間には味がないと感じている。すなわち、味がない人間と感じているのは王子さまではなく作者自身なのである。王子さまはたくさんのバラを見つけて、自分の星にあったバラがこの世にたった一つではないことに気付いて悲しくなる。なぜなら、王子さまは三つの火山とたった一つのバラがある小惑星を特別に思っていたが、火山もバラもたくさんある中の一つでしかなく、つまらないものであったかもしれないと思い、自信がなくなってしまったからである。

2.7 節 キツネとの出会い

バラが特別だと思っていた王子さまはたくさんのバラに出会い、自分の星にいたバラが特別ではない事を知って悲しみに暮れていた。その時、キツネと出会った王子さまはその悲しみを埋める為にキツネに友達になろうと誘うが、キツネから友達になるという事はお互いにかけての存在になるという事を教えられる。そして、その事から自分が愛情をかけて育てたバラもたくさんあるバラの中で自分にとって特別な存在だったと気付いたのである。ここでキツネは王子さまに肝心な事は目に見えないという言葉を贈っている。つまり、この節では心で見ないと物事は見えてこないという作者の率直なメッセージやその事を忘れてしまっている大人への批判が込められていると考えられるのである。

2.8 節 砂漠の秘密

これまで六つの星を巡り地球に辿り着いた王子さまは、キツネに出会い「肝心なことは目に見えない」ことを学んだ。そして、バラとの約束を果たす為に自分の星へ帰ることを決意するのである。その途中、王子さまは砂漠の中で不時着した飛行士に出会い、喉が渇いた飛行士の為に井戸を探しに行く事になる。何も見えず何も聞こえない砂漠であるが、飛行士は何かひっそりと光っているように感じ、その何かに魅力を覚えていた。飛行士はその何かは分からずにいたが、王子さまの「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ」という言葉によって砂漠が美しい秘密に気づくのである。すなわち、この言葉は大切なものは目に見えないという前節の言葉を裏付けていると考えられる。また、この絵本は作者自身が砂漠に不時着して生死の境を彷徨っていた体験を基に書かれたものであり、よって、作者はこの時に「生きる事」について考えたのではないだろうか。そこで、現代の大人は何が欲しいのか分からずに生きていると感じて、生きていく上で大切な事は身近にあるという事をこの砂漠の中にある井戸の存在を通して伝えているのだと考えられるのである。

2.9 節 別れ

自分の星に帰る事を決意した王子さまは井戸のそばにあった石垣に腰掛け、黄色いへびに帰る為に噛んで欲しいと話した。そして、王子さまはその事を飛行士に伝えるのであるが、王子さまはその決意の中に不安や恐れを感じていた。王子さまは飛行士が自分を忘れない為に夜空に輝く星を眺めて欲しいと語りかける。但し、王子さまは敢えて自分の星がどれかを飛行士に伝えずに、たくさんある星の中でどこかに王子さまが居ると思うだけでどの星も好きになれるからと語り、その日の夜に王子さまは飛行士に見守られながら静かに星に帰って行ったのである。王子さまが敢えて自分の星がどれかを飛行士に伝えなかったのは砂漠の秘密と同様に、大切なもの、つまり、隠れている事を知っているだけで物事がより美しく見えるという事をこの節で更に深めているのである。また、王子さまが自分の星に帰る事への不安や恐れを感じていたのは死ぬ事への恐怖もあるだろうが、子どもから大人になる事への不安を意味しているのだと考えられる。すなわち、王子さまの死は子ども時代との決別を表しているのである。

3 章 異説

前章では大人に向けてのメッセージが込められている通説を紹介したが、この章で紹介する異説にはドイツの軍事行動やナチズム・ファシズム、フランスのレジスタンス等の戦争に対する作者の想いが隠されているのである。そこで、第二次世界大戦を経験した作者の時代背景に着目して、通説で触れた内容に秘められた作者のもう一つのメッセージを読み解いていくことにする。

3.1 節 ウワバミ

「星の王子さま」は飛行士が初めて描いたというウワバミがゾウを丸呑みにする絵で始まっており、このウワバミは獲物を呑み込むと半年もの間動けなくなりその間に獲物がこなされるとの記述はとても印象に残るものである。戦争を経験した作者の時代背景を考えると、このウワバミはドイツの軍事行動を表していると考えられる。ここでドイツの軍事行動について考えると、下の年表にあるようにドイツの軍事行動は概ね六ヶ月ごとに起こっていることが見て取れる。つまり、「ゾウ」と「半年」に着目するとウワバミに丸呑みにされた「ゾウ」はドイツに侵略された国々を表しており、ウワバミの「半年」という周期は六ヶ月ごとに起こっているドイツの軍事行動を

表していると考えられるのである。

ドイツ軍事行動年表

1938. 3. 10	ドイツ、オーストラリア侵略
1938. 9. 29	ドイツ、チェコ侵略
1939. 3. 15	ドイツ、チェコ解体
1939. 9. 1	ドイツ、ポーランド侵入
1940. 4. 9	ドイツ、デンマーク、ノルウェー侵入
1940. 5. 10	フランス、ドイツに大敗

3.2 節 バオバブ

三本のバオバブが登場する節ではバオバブを科学の象徴だと考えて、人類の怠慢による地球の崩壊を表していると言説で述べてきたが、怠慢による地球の崩壊であるならば「三本」という具体的な数字が十分に説明できない。また、この節で「一度だけ日頃の遠慮を抜きにして」とあるが、これは作者が叫ばずにはいられなかった重大な訴えが秘められていると考えるべきであろう。そこで、作者が戦争の真ただ中にその身を置いていたことを踏まえると、この三本のバオバブとはナチズム・ファシズム・日本の帝国主義を表したものだと言える。そして、ナチズムやファシズムを成長する前の芽のうちに抜き取っておくべきであったという事を作者は強調しているのである。

3.3 節 バラのトゲ

言説ではバラのトゲについて触れていないが、先の三本のバオバブと同様に、「四つのちっぼけなトゲ」とある「四つ」という数字には重要な鍵が隠されていると考えられるのである。それは作者が生きた時代背景にあるフランスのレジスタンスに関連しており、レジスタンス精神とは『信念に燃えた行為によって裏づけられた精神状態』であり、一言で云うならば『拒否の精神』である。それは、1. 「不名誉の拒否」、2. 「対独協力の拒否」、3. 「ヴィシー体制の供与する一時的な安逸の拒否」、4. 「祖国フランスを飲み去ろうとしている不幸の前に絶望することの拒否」である。

まとめ

以上のように、大人に向けてのメッセージが込められている言説と戦争に対するメッセージが込められている異説について読み解いてきたが、星の王子さまに著者サン＝テグジュペリが込めた一番重要なメッセージは「肝心なことは目に見えない」という事ではないだろうか。しかし、その言葉を聞いて「その通り」と感心するだけでは所詮ウワバミの内側を見ることができない「大人」と同じであり、この言葉を理解した事にはならないのである。すなわち、肝心な事を心で見るという事はウワバミの内側まで見抜く事なのである。これは本文は述べていないが、王子さまとキツネの会話に狩人が登場する場面があり、キツネを捕まえようとする狩人にも毎週決まった日に村の娘達と踊る休暇がある。この節を戦争という点に着目するならば、戦争の中の一時の休息という実際に戦場で戦った作者の体験が伺えるのではないだろうか。

このように単に外側だけを見て理解した気持ちになり満足するのではなく、普通にしていたら見えない内側にまで目を向けて理解しようとしなくては物事の本質を知る事はできないのである。勿論、著者の意図はいくら試行錯誤しても著者本人にしか分からないことであるが、視点を変え

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ～星の王子様～ / 大島 めい, 村上 彩, 村山 美樹

て考える事、そして、物事の本質を知り、大切な事に気付くという事が「肝心なことは目に見えない」という言葉に込められている作者のメッセージと理解して結実とする。最後に、著者は「星の王子さま」以外にも様々な作品を残しており、それらを読み深めた上で再度この絵本を読み返すことを推奨する。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思っておりますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治